

財団法人

加藤記念バイオサイエンス研究振興財団

平成21年度 年報

Annual Report 2009



Kato Memorial Bioscience Foundation

財団法人

加藤記念バイオサイエンス研究振興財団

平成21年度 年報

Annual Report 2009

Kato Memorial Bioscience Foundation

目 次

はじめに	1
I. 平成 21 年度事業報告	
1. 概要	2
2. 年間の経緯	4
3. 助成事業	
(1) 第 21 回研究助成	5
(2) 第 21 回国際交流助成	7
(3) 第 20 回学会等開催助成	10
4. 財団 20 周年記念誌「20 年のあゆみ」及び平成 20 年度年報発行	10
5. 第 21 回研究助成贈呈式	11
6. 平成 21 年度収支決算報告書	21
II. 平成 22 年度事業計画	
1. 事業計画	25
2. 平成 22 年度事業予算	27
3. 平成 22 年度就任の財団役員等	28
III. 助成者からの報告	
1. 第 19 回研究助成報告	29
2. 第 21 回国際交流助成報告	88
IV. 平成 21 年度の財団の運営と組織	
1. 財団の概要	118
2. 設立の趣意	118
3. 目 的	118
4. 組 織	119
5. これまでの助成実績	120
V. 平成 21 年度募集要項	123
VI. 平成 21 年度財団役員等	129
おわりに	131

はじめに

理事長 平田 正



平成 21 年度の財団活動を予定通り実施し無事終了することができました。この 1 年間ご尽力いただきました役員・評議員・選考委員の先生方、及び出捐会社を含む関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

財団活動の柱であります助成事業につきましては、平成 21 年度は研究助成で 25 名に合計 5,000 万円、国際交流助成で 28 名に合計 705 万円、学会等開催助成で 10 件合計 200 万円を助成いたしました。助成金総額は 5,905 万円でありました。

ところで平成 21 年度は、前年度に財団創立 20 周年という節目を迎えた一方、次年度には新公益法人への移行申請を予定している状況から、財団活動の見直しを積極的に行いました。3 つの助成事業のうち、研究助成については応募可能な研究機関の指定枠及び特定分野での隔年募集を廃止し、また国際交流助成については募集時期を一部変更し、それぞれ優れた研究者をより幅広くタイムリーに助成できるよう改善しました。一方、学会等開催助成については、近年の応募状況も考慮し、選考基準の見直しと助成枠の拡大を図るとともに広報活動を強化しました。

10 月には、創立 20 周年記念事業の一環として、20 周年記念誌を発行しました。財団設立の経緯と事業の変遷に関するエピソードや財団活動に関する多くのご意見を皆様から頂戴し、今後の財団活動を考える上でも貴重な資料として遺すことができました。さらに 12 月には、全選考委員にアンケートを依頼し、各助成のあり方、選考基準、選考委員会運営方法等について、貴重な意見をいただきました。

平成 21 年度は、理事・評議員の改選はない年でしたが、2 名の選考委員の任期満了に伴い、新選考委員 2 名が選任されました。

誠に残念なお知らせですが、平成 22 年 3 月に名誉理事の中村寛之助氏、平成 22 年 4 月に名誉理事の大澤利昭氏が逝去されました。謹んで哀悼の意を表しご冥福をお祈り申し上げます。

平成 22 年度は、通常の助成事業に加え、いよいよ 3 月には公益財団法人への移行申請を行うべく準備を進めております。財団の方針・各事業について再確認するとともに、新体制に向けた制度設計、及び事務局機能の向上が課題となります。

当財団といたしましては、我が国バイオサイエンスの振興に向けて新たな視点も加えて活動を発展させてまいりたいと考えております。今後とも皆様のご指導とご支援をお願い申し上げます。

I. 平成 21 年度事業報告

(平成 21 年 4 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日)

1. 概要

平成 21 年度は、平成 21 年 2 月 5 日開催の第 41 回理事会・評議員会で決議された事業計画に基づき、バイオサイエンス分野の研究者に対する助成及び学会等の開催助成、並びに財団創立 20 周年記念誌の発行などの諸事業を行った。

また平成 23 年 3 月に予定している公益財団法人への移行認定申請に向けての具体的準備を開始した。

(1) 事業

1) 研究助成 (一件 200 万円、25 名、総額 5000 万円)

平成 21 年度は、従来の「メディカルサイエンス分野」「バイオテクノロジー分野」の助成に加えて、指定研究助成枠として「癌分野における基礎研究から臨床への橋渡し研究」を設定した。なお、平成 18 年度から継続していたバイオテクノロジー部門の「奨励研究助成」については、これまでのべ 18 名への助成を行ない、一定の役割を終えたと判断して募集を終了した。

6 月から 8 月末まで募集した結果、指定研究を合わせて 251 件の応募があり、全 25 件の研究助成を行なった。応募総数は前年度(奨励研究・特別枠を含む)の 252 件とほぼ同数であったが、メディカルサイエンス分野の応募制限見直しにより、同分野の応募者が約 1.7 倍に増えた。

2) 国際交流助成 (地域により 1 件 15 万円から 30 万円、28 名、総額 705 万円)

よりタイムリーに助成できるよう、上期について募集時期の段階的見直しを進めており、前年度より一ヶ月早い 3 月末に募集を締切り、4 月に選考を行なった。上期は 20 件の応募に対して 10 件の助成を行ない、下期は 43 件の応募に対して 18 件の助成を行なった。

3) 学会等開催助成 (1 件 20 万円、10 件、総額 200 万円)

従来、学会等開催助成は毎年 5 件に対して助成を行なっていたが、希望が多いことから本年度より 1 件あたりの助成額は維持し、助成件数を 10 件に増やした。

4) 第 21 回研究助成贈呈式 (総額 323 万円)

研究者間の交流促進を意図して 3 月 5 日開催の贈呈式では、助成金受領者(以下「助成者」)による研究計画発表をポスターセッション形式に変更するとともに、2 名の選考委員による特別講演会を開催した。

5) 財団 20 周年記念誌および年報の発行 (総額 310 万円)

当財団は昭和 63 年 12 月に設立され、平成 20 年 12 月に 20 周年を迎えた。本年度は、設立の経緯と事業の変遷、寄稿文、平成 21 年 3 月に挙行了した 20 周年記念式典の様子などをまとめた記念誌を発行した。また記念誌には 20 年間の年表、歴代役員等、全助成者名簿などの資料も掲載した。

併せて平成 20 年度年報（第 10 号）を発行した。

（2）理事会・評議員会

2 回の定例理事会・評議員会を下記のとおり開催し、全ての議案は承認された。

1) 第 42 回理事会・第 42 回評議員会

日程	平成 21 年 6 月 5 日（金）
場所	如水会館
出席者	理事 13 名、評議員 13 名（それぞれ委任状出席含む）
主な議題	①平成 20 年度事業状況報告書及び収支決算報告 ②平成 21 年度研究助成募集要項の改定 ③学会等開催助成の募集・選考方法の改定

2) 第 43 回理事会・第 43 回評議員会

日程	平成 22 年 2 月 5 日（金）
場所	如水会館
出席者	理事 12 名、評議員 11 名（それぞれ委任状出席含む）
主な議題	①第 21 回研究助成対象者の選出 ②第 21 回学会等開催助成対象の選出 ③平成 22～25 年度選考委員の選出 ④平成 22 年度事業計画及び収支予算 ⑤最初の評議員の選任方法及び運営規則

（3）管理業務

1) 公益財団法人への移行準備

当財団は公益財団法人への移行を目指しており、平成 21 年 2 月の第 41 回理事会・評議員会において移行認定申請を平成 22 年度中に行なうことが決議された。本年度は平成 23 年 3 月に移行申請するための各種情報収集を行なうと共に、制度基本設計と新定款案の検討を開始した。また内閣府に対して電子申請システムの利用申請を行なった。

新制度移行後の最初の評議員については、中立的な委員会で選任すること及びその委員会の設置・運営規則を平成 22 年 2 月の第 43 回理事会・評議員会にて決議し、文部科学大臣に対して「最初の評議員の選任に関する定め」の認可申請を 3 月に行なった。（平成 22 年 4 月 1 日付認可）

2) 特定公益増進法人の資格更新

本年度は、税制面で優遇措置を得られる「特定公益増進法人」の資格に関する 2 年毎の更新年であった。文部科学大臣に対して 11 月に更新手続きを行い、12 月 14 日付で証明を取得した。

3) 役員等の異動

本年度は理事・監事・評議員の2年任期更新の初年度であった。4月1日付けで垣添忠生氏、郷通子氏が新理事に、尾崎明夫氏、福山透氏、堀之内末治氏、三箇山俊文氏が新評議員に就任した。

本年度の選考委員については、山本一彦前委員長の任期満了に伴い、前副委員長の山根久和氏が委員長に就任した。また新選考委員として、岩坪威氏（副委員長）、長田裕之氏、鈴木啓介氏、中村春木氏、中山亨氏、西山真氏、三森経世氏が就任した。

堀之内末治評議員が7月に逝去し、永井良三評議員が12月に自己都合により辞任した。

任期満了により、3月末をもって選考委員の久保田紀久枝氏、瀬原淳子氏が退任した。

4) 選考委員アンケート

新公益法人移行に際しての各種見直しと整備の一環として、研究助成の募集・選考方法や新規事業などについて平成21年12月に選考委員アンケートを実施した。提出された意見については第43回理事会・評議員会に報告を行い、今後の助成事業や財団の運営の参考にする。

5) 事務局トピックス

新公益法人移行に相応しい事務局体制とすべく、公益法人用会計ソフトウェアを導入し、経理業務の効率化を図った。なお当財団はこれまで固定資産を保有していなかったが、本ソフトウェアは固定資産として管理する。

2. 年間の経緯 (平成21年4月～平成22年3月)

平成21年

- 4月6日 平成21年度事業計画及び収支予算書提出（文部科学省）
- 4月21日 第21回国際交流助成（上期）選考会 於：KKRホテル
- 4月20日 役員変更登記
- 4月22日 国と密接な関係にある特例民法法人に該当しないことを公表
- 5月18日 会計及び業務監査
- 6月5日 第42回理事会・第42回評議員会 於：如水会館
- 6月25日 平成20年度事業状況報告書提出（文部科学省）
- 8月31日 第21回研究助成及び第21回国際交流助成（下期）募集締切
- 9月15日 第21回国際交流助成（下期）選考会 於：KKRホテル
- 10月1日 財団20周年記念誌「20年のあゆみ」及び
財団年報第10号（平成20年度）刊行
- 10月31日 学会等開催助成募集締切
- 12月3日 第21回研究助成選考委員会
第20回学会等開催助成選考会 於：如水会館
- 12月14日 特定公益増進法人更新証明取得（文部科学省）

12月16日 選考委員アンケート実施

平成22年

- 2月5日 第43回理事会・第43回評議員会 於：如水会館
- 3月5日 第21回研究助成贈呈式 於：如水会館
- 3月15日 「最初の評議員の選任に関する定めについて」認可申請（文部科学省）
- 3月24日 平成22年度事業計画・予算書提出（文部科学省）
- 3月30日 第22回国際交流助成（上期）選考会 於：KKRホテル東京

3. 助成事業

平成21年度助成事業のまとめ（平成20年度対比）

助成事業	応募件数		助成件数		採択率（％）		予算(万円)		実績(万円)	
	H21	H20	H21	H20	H21	H20	H21	H20	H21	H20
研究助成	251	252	25	31	10.0	12.3	5,000	5,900	5,000	5,900
メディカルサイエンス	148	89	10	11	6.8	12.4	2,000	2,200	2,000	2,200
バイオテクノロジー	80	87	10	11	12.5	12.6	2,000	2,200	2,000	2,200
奨励研究	—	41	—	6	—	14.6	—	600	—	600
指定研究助成	23	—	5	—	21.7	—	1,000	—	1,000	—
20周年特別枠	—	35	—	3	—	8.6	—	900	—	900
国際交流助成	63	121	28	32	44.4	26.4	750	750	705	734.9
上期	20	67	10	18	50.0	26.9	450	450	280	430
下期	43	54	18	14	41.9	25.9	300	300	425	305
学会等開催助成	10	5	10	5	100.0	100.0	200	100	200	100

（1）第21回（平成21年度）研究助成

①「研究助成」メディカルサイエンス分野、②「研究助成」バイオテクノロジー分野、③「指定研究助成」（癌分野における基礎研究から臨床への橋渡し研究）に区分して募集した。

今回より、応募可能な研究機関の指定枠を撤廃するとともに、メディカルサイエンス分野における2グループに分けによる隔年募集制度も廃止し、優れた研究者をより幅広くタイムリーに助成できるよう募集要項を改定した。さらに学部毎への募集要項配布を中止し、大学や研究機関本部に募集要項を送付し、学内等のルートを通しての広報を依頼した。

平成21年6月～8月末の期間募集した結果、合計251件（前年度252件）の応募があった。そのうち女性研究者は57件（同43件）であった。

全選考委員（20名）による事前の一次審査をふまえ、選考委員会を平成21年12月3日（木）に開催した。その結果、①「研究助成」メディカルサイエンス分野10名、②「研究助成」バイオテク

ノロジー分野 10 名、③「指定研究助成」5 名の候補者 25 名が選出された。

平成 22 年 2 月 5 日（金）に開催された第 43 回理事会・評議員会で、選考委員会答申のとおり、助成対象者（助成者）合計 25 名が決定された。

平成 22 年 3 月 5 日（金）に如水会館で開催した贈呈式において、1 件当たり 200 万円の助成金目録及び記念の盾を贈呈した。

第 21 回加藤記念研究助成者名簿

1) 「研究助成」メディカルサイエンス分野（10 名）

(1 件 200 万円)

氏名	所属機関名	職名	研究題目
石井 清朗	筑波大学大学院人間総合科学研究科 疾患制御医学専攻代謝・糖尿病内科	助教	海馬における内因性カンナビノイドと脂肪酸伸長酵素の役割
石原 直忠	東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科細胞生理学分野	講師	発生・分化時のミトコンドリア形態変化とその生理的役割に関する研究
大塚 稔久	山梨大学大学院医学工学総合研究部 生化学講座第一教室	教授	神経終末アクティブゾーンにおけるリン酸化ネットワークとその役割
大森 義裕	大阪バイオサイエンス研究所 発生生物学部門	副部長	繊毛関連疾患モデル動物における繊毛長制御機構の解明
竹内 純	東京大学分子細胞生物学研究所 高次機能研究分野	准教授	心臓構成細胞誘導メカニズムにおける研究
竹本一木村 さやか	東京大学大学院医学系研究科 脳神経医学専攻神経生化学教室	助教	GABA 依存的 CaMKK-CaMKIalpha カスケードによる神経回路形成促進
花房 洋	名古屋大学大学院理学研究科 生命理学専攻生体応答論講座	助教	新規 MAPKKK 様キナーゼ LRRK1 による EGFR 細胞内トラフィック制御
本田 賢也	東京大学大学院医学系研究科 免疫学講座	准教授	消化管常在細菌群の免疫系への影響による細分化とその応用
松田 七美	早稲田大学 理工学術院 先進理工学部生命医科学科	講師	細胞競合に関わるエネルギー代謝の分子機構
水野 大介	九州大学高等研究機構 (理学部物理)	特任 准教授	力学刺激により誘起される情報伝達過程を可視化するための人工骨細胞ネットワークの構築

2) 「研究助成」バイオテクノロジー分野（10 名）

(1 件 200 万円)

氏名	所属機関名	職名	研究題目
尾仲 宏康	富山県立大学工学部 生物工学研究センター	講師	放線菌由来インドロカルバゾール抗がん物質の生合成に関する研究
小松 護	北里大学北里生命科学研究所 微生物制御工学研究室	研究員	産業利用放線菌を宿主とした有用物質生産系の構築
末永 聖武	慶應義塾大学理工学部 化学科天然物化学研究室	准教授	ピセプロモアミドの合成と生物活性

鈴木 敦	横浜国立大学 学際プロジェクト研究センター	特任教員 (助教)	哺乳類生殖細胞形成機構の解析
關 光	横浜市立大学木原生物学研究所 植物応用ゲノム科学部門	特任准 教授	組み換え酵母を用いたトリテル ペノイドライブラリー創製研究
高久 洋暁	新潟薬科大学応用生命科学部 応用微生物・遺伝子工学研究室	准教授	組換え大腸菌によるバイオマス 由来化学工業原料中間体の発酵 生産
七谷 圭	東北大学大学院工学研究科 バイオ工学専攻応用生物物理化学分 野	助教	微生物による物質生産の効率化 へ向けたアミノ酸輸送体の輸送 活性制御メカニズムの解明
松下 智直	九州大学大学院農学研究院 SSP 研究室	特任准 教授	植物の光情報受容体フィトクロ ムBのN末端領域と相互作用す るシグナル伝達因子の探索
愿山 郁	奈良先端科学技術大学院大学 バイオサイエンス研究科	国際 リサーチ フェロー	植物における p53 ホモログの機 能解析と環境ストレス耐性植物 への応用
渡辺 賢二	静岡県立大学大学院薬学研究科 生薬・天然物化学研究室	准教授	ものづくりを指向した高機能性 生体触媒の創製

3) 「指定研究助成」癌分野における基礎研究から臨床への橋渡し研究 (5名)

(1件 200万円)

氏名	所属機関名	職名	研究題目
石井 直人	東北大学大学院医学系研究科 病理病態学講座免疫学分野	教授	画期的なヒト白血病モデルの開 発とその応用
宇和川 匡	東京慈恵会医科大学 外科学講座	助教	膵臓癌化学療法耐性克服に向け た基礎的研究
大庭 成喜	東京大学大学院医学研究科 器官病態内科学講座腎臓内科学	助教	血中の micro RNA 測定による 腎癌及び前立腺癌患者の鋭敏か つ簡潔な診断法の確立
小川 数馬	金沢大学医薬保健研究域薬学系 臨床分析科学研究室	准教授	シグマ受容体を標的とした PET 薬剤の開発と包括的癌治 療法の確立を目指した研究
永坂 岳司	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 消化器・腫瘍外科学教室	助教	各消化器腫瘍特異的メチル化変 異をマーカーとした非侵襲的早 期診断技術の開発

(2) 第21回(平成21年度)国際交流助成

平成21年度は上期応募者20名より10名、下期応募者43名より18名、合計28名に対し選考会による審査・選考のうえ、合計705万円(上期280万円、下期425万円)を助成した。

1) 第21回加藤記念国際交流助成者(上期)名簿

(所属は助成時のもの) (10名)

氏名	所属機関名	職名	学会名	開催場所	助成額 (万円)
岩室 宏一	東京大学大学院医学系 研究科 脳神経医学専攻 脳神経外科	大学院 生	13th International Congress of Parkinson's Disease and Movement Disorders	フランス	30
金井 将昭	大阪大学大学院 医学系研究科 生化学・分子生物学講座 分子再生医学	特任 研究員	12th Meeting of the international society for Tryptophan Research	イタリア	30
金澤 雅人	新潟大学脳研究所 神経内科学教室	大学院 生	2009 Annual meeting, American Academy of Neurology	アメリカ ワシントン 州	20
木村 俊秀	大分大学医学部 薬理学教室	助教	45th European Association for the Study of Diabetes Annual Meeting	オースト リア	30
倉林 伸博	東京大学大学院 理学系研究科 生物化学専攻	大学院 生	XI. Congress of the European Biological Rhythm Society	フランス	30
杉浦 真由美	神戸大学大学院 理学研究科生物学専攻	特別 研究員	XIII International Congress of Protistology	ブラジル	30
竹田 典代	筑波大学大学院 生命環境科学研究科 下田臨海実験センター	研究員	Developmental Biology of the sea urchin XIX	アメリカ マサチュー セッツ州	25
中川 正宏	東京大学大学院 医学系研究科 血液・腫瘍内科	特任 助教	"EMBO WORKSHOP" RUNX Transcription Factors in Development & Disease	イギリス	30
柳川 正隆	京都大学大学院 理学研究科 生物物理学教室 分子生体情報学分野	大学院 生	15th International Congress on Photobiology	ドイツ	30
渡邊 麻衣	東京大学大学院 総合文化研究科 広域科学専攻	大学院 生	The 13th International Symposium on Phototrophic Prokaryotes	カナダ ケベック 州	25

2) 第20回加藤記念国際交流助成者(下期)名簿

(所属は助成時のもの) (18名)

氏名	所属機関名	職名	学会名	開催場所	助成額 (万円)
Azran Azhim	東京電機大学 フロンティア共同研究 センター	助教	2009 IEEE Symposium on Industrial Electronics and Applications-Biomedical & Computational Biology	マレーシ ア	15
伊藤 陽子	横浜市立大学大学院 国際総合科学研究科 生体超分子科学専攻	大学院 生	Gordon Research Conferences on Sensory Transduction in Microorganisms	アメリカ カリフォル ニア州	20
王 晨	山口大学大学院 医学系研究科 器官制御分子学専攻	大学院 生	49th American Society for Cell Biology Annual Meeting	アメリカ カリフォル ニア州	20

大河内 直子	東京大学 医学部付属病院輸血部	助教	The 51st annual meeting of the American Society of Hematology	アメリカ ルイジア ナ州	25
片山 貴博	北海道大学大学院 薬学研究院 薬理学研究室	助教	Neuroscience 2009 (39th annual meeting of the Society for Neuroscience)	アメリカ イリノイ 州	25
塩田 倫史	東北大学大学院 薬学研究科薬理学分野	助手	Neuroscience 2009 (39th annual meeting of the Society for Neuroscience)	アメリカ イリノイ 州	25
田中 暢明	京大大学生命科学系 キャリアパス形成ユニ ット	特定 研究員	Swiss Neurofly and Satellite Meeting	スイス	30
田中 瑠璃子	京都大学 医学部附属病院 輸血細胞治療部	大学院 生	The 51st annual meeting of the American Society of Hematology	アメリカ ルイジア ナ州	25
田村 雄一	慶應義塾大学大学院 医学研究科内科学専攻	大学院 生	American Heart Association Scientific Sessions 2009	アメリカ フロリダ 州	25
野下 浩二	秋田県立大学 生物資源科学部 生物生産科学科 生物活性物質分野	助教	Fifth Asia Pacific Conference on Chemical Ecology	アメリカ ハワイ州	20
野村 洋	東京大学大学院 薬学系研究科 薬品作用学教室	特任 助教	Neuroscience 2009, Eighth Annual M CCS meeting	アメリカ イリノイ 州	25
原 哲也	神戸大学大学院 医学研究科 内科学講座 循環器内科学分野	医学 研究員	American Heart Association Scientific Sessions 2009	アメリカ フロリダ 州	25
丸山 史人	東京工業大学大学院 生命理工学研究科 生命情報専攻	助教	ProkaGENOMICS2009 (4th European Conference on Prokaryotic Genomics)	ドイツ	30
村松 里衣子	大阪大学大学院 医学系研究科 附属子どものこころの 分子統御機構研究センター	特任 助教	Neuroscience 2009 (39th annual meeting of the Society for Neuroscience)	アメリカ イリノイ 州	25
谷田部 淳一	福島県立医科大学 医学部 腎臓高血圧・糖尿病内 分泌代謝内科学講座	博士 研究員	Renal Week 2009, 42nd Annual Meeting of the American Society of Nephrology	アメリカ カリフォル ニア州	20
山田 真吏奈	慶應義塾大学医学部 解剖学教室	特別 研究 助教	Neuroscience 2009 (39th annual meeting of the Society for Neuroscience)	アメリカ イリノイ 州	25
山本 伸一郎	京都大学大学院 薬学研究科 生体分子認識学分野	助教	Biophysical Society 54th Annual Meeting	アメリカ カリフォル ニア	20
渡部 裕	新潟大学医学部 循環器内科	特任 助教	American Heart Association Scientific Sessions 2009	アメリカ フロリダ 州	25

(3) 第20回(平成21年度)学会等開催助成

第20回学会等開催助成は応募のあった10件の学会に対して助成を実施した。助成金額は1件20万円とし、合計200万円を助成した。

会議名	申請者	開催期間	開催場所
第9回日本蛋白質科学会年会	熊本大学 山縣ゆり子	平成21年 5月20日～22日	熊本
第1回エコロジカルボラタイル 国際シンポジウム	山口大学 松井健二	平成21年 7月3日～4日	東京大学
第19回日本樹状細胞研究会	国立がんセンター 高上洋一	平成21年 7月9日～11日	兵庫
第29回札幌がんセミナー 国際シンポジウム 「ピロリ菌と胃がん」	北海道大学 畠山昌則	平成21年 7月13日～14日	北海道大学
2009年度日本放線菌学会大会	秋田県立大学 小嶋郁夫	平成21年 7月16日～17日	秋田
国際シンポジウム福岡プリン 2009:創薬シーズ探索の新戦略	九州大学 井上和秀	平成21年 7月23日～25日	福岡
第14回国際生物無機化学会議	名古屋大学 渡辺芳人	平成21年 7月25日～30日	名古屋
第5回オートファジーに 関する国際会議	京都大学 阪井康能	平成21年 9月24日～28日	滋賀
第6回先端医科学 国際シンポジウム	自治医科大学 小澤敬也	平成21年 11月7日	栃木
第11回国際有機化学京都会議	京都大学 吉田潤一	平成21年 11月9日～13日	京都

4. 財団20周年記念誌「20年のあゆみ」及び平成20年度年報発行

財団20周年記念誌「20年のあゆみ」及び平成20年度年報を10月1日付で発行した。冊子は歴代財団関係者(理事・監事・評議員・選考委員・助成者・職員等)、大学、研究機関、主務官庁、図書館、出捐会社関係者等に贈呈した。記念誌は電子化して財団ホームページに掲載した。

(1) 記念誌

内容： 理事長挨拶、加藤辨三郎・加藤幹夫氏略歴、財団設立の経緯と事業の変遷、寄稿文、記念式典挨拶・祝辞、記念講演会、資料編(寄附行為、年表、歴代役員等、事業・財務推移、研究助成、国際交流助成、学会等開催助成、研究者育成助成、公開シンポジウム、刊行物)、等
配布数：約1,030冊

(2) 年報

内容： 理事長挨拶、平成 20 年度事業・決算報告、平成 21 年度事業・予算計画、第 18 回研究助成報告、第 20 回国際交流助成報告、等

配布数：約 250 冊

5. 第 21 回研究助成贈呈式

第 21 回研究助成贈呈式を平成 22 年 3 月 5 日（金）15 時から東京竹橋の如水会館にて行なった。理事長挨拶の後、指定研究助成を含む全 25 名（2 名代理出席）に対して助成金目録及び記念の盾が理事長から贈呈された。その後、来賓の文部科学省研究振興局ライフサイエンス課石井康彦課長および協和発酵キリン株式会社松田讓社長より祝辞を頂いた。

引き続き、自治医科大学・間野博行教授、東北大学・中山亨教授による特別講演が行なわれた。

- 1) 自治医科大学ゲノム機能研究部教授 間野博行
「肺がんの新規原因遺伝子の発見と分子標的療法への展開」
- 2) 東北大学大学院工学研究科教授 中山 亨
「植物グリコシルトランスフェラーゼの機能進化と植物二次代謝産物の多様性」

式典終了後、懇親会場に移動して助成者によるポスターセッション形式の研究計画発表会を行った。ポスターセッション形式は初めての試みであったが、助成者同士や助成者と参加者の中で活発な意見交換が行なわれた。その後、森謙治理事による乾杯の発声があり、同会場で祝賀会に移行した。

主な出席者（敬称略）

来 賓： 石井康彦、松田 讓

財団元役員等： 木下祝郎（名誉会長）、岡田吉美（名誉理事）、中野洋文（元評議員）、田中正生、鈴木武夫、土井内徹（以上 元常務理事）、古屋 晃、萩野浩志、白幡公勝、落合恵子（以上 元事務局長）

現財団役員等： 平田 正（理事長）、高橋 充（常務理事）、大塚榮子、郷 通子、森 謙治（以上 理事）、北原 武、三箇山俊文（以上 評議員）、山根久和、間野博行、中山 亨、長田裕之、西山 真（以上 選考委員）

出捐会社関係： 奈良 高、伊藤菁莪、花井陳雄、大島悦男、加藤慎一郎、熊澤利昭、橋本信一、中村俊也

(1) 理事長挨拶

理事長 平田 正

加藤記念バイオサイエンス研究振興財団・理事長の平田正でございます。本日は皆様にはお忙しい中、第21回加藤記念研究助成贈呈式に多数ご出席賜り、誠に有り難うございます。

本日は来賓といたしまして、主務官庁の文部科学省ライフサイエンス課長石井康彦様、出捐会社である協和発酵キリン株式会社・社長の松田譲様にご臨席賜りました。さらに財団の選考委員をお願いしておりますお二人の先生に特別講演をお引き受けいただきました。心から御礼申し上げます。

当財団は、旧協和発酵工業株式会社の創立者でありました故加藤辨三郎博士の「バイオサイエンスを通じて社会の発展に寄与したい」という遺志を実現すべく、1988年（昭和63年）に設立された公益法人でございます。

爾来当財団は、「科学技術の発展を支える根幹は若い研究者の頭脳である」との認識から、創造的かつ先駆的研究を目指す若き研究者に対する助成を実施してまいりました。

皆様ご承知の通り、少子高齢化が進み資源の乏しいわが国は、科学技術の振興なくして、今後の発展を期待することはできません。近年、政府レベルの科学研究補助金も拡充されてはいますが、真に独創的な研究は必ずしも大型研究費を伴う環境からではなく、むしろ個性的な研究者の自由な発想と粘り強い研鑽から生み出されるものであります。

当財団は、このような認識に立ち、バイオサイエンスの研究分野において、優れた若き研究者に対し、いささかではありますが支援したいと考えている次第でございます。

昨今の経済情勢には大変厳しいものがありますが、幸い当財団は、出捐会社の協和発酵キリ

ン株式会社から継続して多大な財政支援をいただいております。

また、多くの皆様のご協力に支えられ、本年度も予定通り事業を進めることができました。その結果、本年度は「国際交流助成」では63名の応募に対し28名の方に総額705万円、「学会等の開催助成」は10件、200万円助成いたしております。

さて、財団の最も大きな事業であり本日贈呈いたします「研究助成」ですが、本年度はメディカルサイエンス分野とバイオテクノロジー分野別の従来区分に加え、メディカルサイエンス分野の一部を「癌分野における基礎から臨床への橋渡し研究」とする指定研究とし、合計三つの区分で募集致しました。お陰様で本年度も多数の応募をいただきました。合計251名の応募に対し25名の方々に、総額5,000万円の助成金と記念の盾を贈呈いたします。

本日助成を受けられます皆様方の研究が、創意と情熱により、近い将来「果実」を結び、わが国のバイオサイエンスおよび産業の発展、ひいては地球規模の諸問題の解決に貢献されるよう祈念致しております。

終わりに、本研究助成の選考に当たられました選考委員長の山根久和先生はじめ20名の選考委員の諸先生に心から感謝申し上げます。

平成22年度は、バイオサイエンスのさらなる振興と発展を目指すべく、財団としては新公益法人制度移行のための具体的作業を行う年になります。

本日ご臨席の皆様には、加藤記念バイオサイエンス研究振興財団に対し、今後ともより一層のご支援・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。私のご挨拶とさせていただきます。

どうも有難うございました。

(2) 選考経過報告

選考委員長 山根 久和

選考委員長の東京大学生物生産工学研究センターの山根でございます。研究助成を受けられる25名の皆様、おめでとうございます。

さて、第21回加藤記念研究助成の応募数は、メディカルサイエンス分野148件、バイオテクノロジー分野80件、前年度までの奨励研究にかわって本年度から始まりました指定研究助成「癌分野における基礎研究から臨床への橋渡し研究」が23件で、全体の応募件数は251件となりました。奨励研究募集を中止したにもかかわらず、一昨年と比べて全体で28件の増加、また20周年特別枠を追加した昨年と比べても34件の増加でありました。中でもメディカルサイエンス分野が昨年比59件と大幅に増加しておりますが、これは、昨年まで応募が隔年ごとになるように研究機関を二つにグループ分けしていたのを本年度よりグループ分けをなくし全ての研究機関が毎年応募できるようにしたためと考えられます。また、女性研究者からの応募も着実に増加し、全体で61件、昨年と比べて18件の増加となりました。

選考にあたりましては、まず、加藤記念研究助成の趣旨である「創造的かつ先駆的研究を支援する」ことを念頭におき、さらに研究室の立

ち上げ状況、女性研究者支援、所属研究機関の地域性、他の研究助成との重複等についても考慮致しました。

それぞれの申請について、20名の選考委員が分野別に複数で担当して書面審査を行い、次に選考委員が一堂に会して十分な審議を行いました。その結果、研究助成として、メディカルサイエンス分野10件、バイオテクノロジー分野10件、指定研究助成5件合計25件を採択致しました。競争率も年々高くなる傾向にあり、今回は全体では10倍近い難関となりました。

今回採択された研究課題がいずれも創造性・先駆性に優れているものであることは言うまでもありませんが、研究助成を受けられる皆様には、助成金を活用して是非研究目的を達成し、バイオサイエンスの発展に貢献していただきたいと思います。

有能な若手研究者の発掘・育成に長年にわたって尽力されてきた加藤記念バイオサイエンス研究振興財団にあらためて敬意を表しますとともに、助成を受けられる皆様のご研究の益々の発展を祈念しまして、「第21回加藤記念研究助成」選考経過報告とさせていただきます。

(3) 祝辞

文部科学省研究振興局ライフサイエンス課長 石井 康彦

まず始めに、本日、加藤記念バイオサイエンス研究振興財団から研究助成金の贈呈を受けられた25名の研究者の皆様にご心よりお慶び申し上げます。

皆様方は、多数の応募者の中から厳正な審査を経て、これまでの顕著な業績や将来性を高く評価されました。本日の受賞を契機として、今後一層精進されご活躍されることで、我が国の科学技術の発展の一翼を担っていただくことを大いに期待しております。

ライフサイエンス研究は、国民の健康長寿や低炭素社会の実現、新興・再興感染症への対応、食の安全の確保などに資するとともに、食糧自給率向上や医薬品・医療機器等の産業競争力の強化、新産業の創出を図る上で、重要な科学技術分野であります。国としてもライフサイエンス分野の研究を重点的に推進すべき分野の一つとして、積極的かつ戦略的に推進してきているところでございます。

文部科学省におきましては、非常に厳しい国家財政状況の中、科学技術関係予算の全体の拡充を図るとともに、ライフサイエンス研究を引き続き戦略的な重点分野の一つと位置づけて、

大学などにおける基礎研究から課題解決を目指した研究まで、幅広い取り組みをしてきているところでございます。しかしながら、政府による研究の支援だけで十分な研究ができるというわけでないことは言うまでもございません。

このような中、加藤記念バイオサイエンス研究振興財団におかれては、設立以来、前年度まで延べ444名の若手研究者への研究助成を行ってきていることは、大変意義深いことと考えております。バイオサイエンスの振興に終生ご尽力されました加藤辨三郎博士の思いを継承し、民間財団として永年バイオサイエンス分野における若手研究者の発掘にご尽力されてきたことは、我が国の科学技術振興の一翼を担い、社会経済の発展に大きく寄与するものでございます。このような貴財団の活動に対しまして、賞賛の意を示すとともに、深く敬意を表したいと思っております。

最後になりましたが、皆様方のご研究と加藤記念バイオサイエンス研究振興財団の一層のご発展を祈念申し上げまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

本日はおめでとうございます。

(4) 祝辞

協和発酵キリン株式会社代表取締役社長 松田 譲

先ずは、研究助成を受けられる皆様、誠にありがとうございます。それから選考に当たられました先生方、また関係者の皆様、本当にご苦労様でございました。

さて、以前この財団の選考委員をお務めになられたある先生からお話を伺ったことがございますが、この財団の研究助成の選考は、大変厳しい、そして公正な審査がなされるということでございます。一つ一つのご提案に対し、十分時間をかけて議論を尽くすということが大きな特徴だということでもございました。その選考に当たられる先生方の眼力あるいは目利きとでもいいますものが、実績にもよく表れていると思います。例えば、第1回目の受賞者の中には、皆様よくご存知の論文引用件数が世界一の実績を持っておられる審良静男先生、あるいはゲノム研究で著名な中村裕輔先生が含まれております。またその後受賞されました多くの先生方が、大変ご活躍になり、現在要職について世界をリードしておられるということもございます。本日受賞された皆様方は、是非、自信と誇りをもって今後益々ご活躍いただきたいと思います。願っております。

それから、この財団の名前が示すとおり、こ

の財団は協和発酵工業株式会社の創業者であります加藤辨三郎翁の遺志を受け継いで運営されております。加藤辨三郎翁は、企業と社会の係わりというものについて、非常に強く意識し、そして実践された方でございます。例えば、日本が戦後、結核が蔓延して非常に困っていた時代に、当時の会社資本金の3倍もの大金を戦勝国であるアメリカに支払って、メルク社からストレプトマイシンの製造技術を導入しました。また戦後、日本が食糧難で苦しんでいる時代に、日本人の体格向上を願って出した研究テーマが発展して、発酵法によるアミノ酸の工業的生産を世界に先駆けて完成させました。このように、技術や研究成果を事業を通じて世の中に貢献するということを実践されたわけでございます。

従いまして、こういうことに思いを馳せれば、本日受賞された若い研究者の皆様方の研究成果が、いつか直接又は間接に世の中の役に立つという日がくれば、加藤辨三郎翁はもちろんのこと、選考に当たられた先生方の本望であると私は確信いたしております。是非その日が来ることを願いまして私の挨拶とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。

(5) 特別講演

1) 肺がんの新規原因遺伝子の発見と分子標的療法への展開

東京大学大学院医学系研究科ゲノム医学講座 特任教授

自治医科大学ゲノム機能研究部 教授 間野 博行

がんは成人死因の主要原因であり、驚くべき事にがんによる死亡者数は今も増え続けているのが現状である。がんの治療成績に新たなブレークスルーを得るためには、発がんの原因に基づく分子標的療法の開発が必須であろう。我々は、まず、各種がん細胞の中において発がんに関与する遺伝子を効率よくスクリーニングする技術を開発するために、微量の患者検体細胞から cDNA を作成し、これをレトロウイルスに組み込む cDNA 発現ライブラリー作成法を開発した。本システムを用いて肺腺がん外科切除検体からライブラリーを構築し 3T3 線維芽細胞に感染させることでがん遺伝子の探索を行った。その結果、驚くべき事に 5'側と 3'側が異なる遺伝子由来の cDNA を発見した。5'側は微小管会合タンパクの一種である EML4 (echinoderm microtubule-associated protein-like 4) のアミノ末端側約半分をコードし、3'側は受容体型チロシンキナーゼ ALK (anaplastic lymphoma kinase) の細胞内チロシンキナーゼドメインをコードしていたのである (図) ¹⁻³⁾。さらに驚いたことに、本来 *EML4* と *ALK* 遺伝子はヒト 2 番染色体短腕上のごく近い場所 (12 Mbp 離れている) に互いに反対向きに存在するのである。従って *EML4-ALK* 融合遺伝子が作られるためには、この 12 Mbp の領域が 2p 内で小さな

逆位を形成する必要があるのだ。固形腫瘍は一般に染色体転座は稀であると言われてきたが、我々が患者ゲノムを基質として *EML4* と *ALK* 上にそれぞれプライマーを設置して PCR を行ったところ、単一の産物が得られ、*EML4* と *ALK* 遺伝子内での切断・融合点が決定された。

さらに我々は、*EML4-ALK* キナーゼが実際の生体で肺がんの原因となることを直接証明する目的で、同キナーゼを肺胞上皮細胞特異的に発現するトランスジェニックマウスを作成した。驚くべき事に、これらマウスはいずれも生後僅か数週で両肺に数百個の肺腺がんを多発発症したのである。さらに、経口摂取可能な *ALK* 特異的阻害剤 2,4-pyrimidinediamine を *EML4-ALK* 肺がん発症マウスに一日一回投与し、その治療効果を系時的 CT スキャンにて評価したところ、僅か 25 日間の治療で肺がんほぼ全てが消失した ⁴⁾。すなわち *EML4-ALK*こそが同遺伝子陽性肺がんの主たる発がん原因であり、だからこそそ

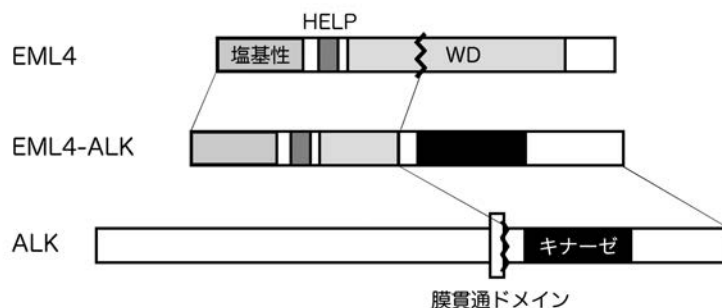


図 EML4-ALK融合キナーゼの発見

*EML4*タンパクは塩基性領域、HELPドメイン及びWDリピートからなるが、そのWDリピート領域の途中で *ALK*キナーゼの細胞内領域と融合した *EML4-ALK*タンパクが非小細胞肺癌で生じていることが明らかになった。文献1より改変。

の機能を抑制することは極めて有効な分子標的療法となると考えられた。

2008年より既に海外においてはALK特異的阻害剤を用いたEML4-ALK陽性肺がんに対する第一相臨床試験が開始されており、その特効薬とも言うべき効果が既に報告されている (http://www.asco.org/ASCOv2/Meetings/Abstracts?&vmview=abst_detail_view&confID=65&abstractID=30947)。我々は、我が国に存在するEML4-ALK陽性肺がん症例を救うべく、また我が国にALK阻害剤の臨床試験を誘致するべく、all JapanでのEML4-ALK陽性肺がん診断ネットワーク「ALK肺がん研究会：ALCAS」を2009年3月より立ち上げた。既に数百例を超える臨床検体の解析を行っており、20例を超えるEML4-ALK陽性肺がん症例を発見している。こ

れら陽性症例には海外で行われている臨床試験の情報を全て伝え、海外での治験参加を希望する患者にはALCASが橋渡しの役割を果たしてきた。こうして我々の発見によって、今後世界中で何万人・何十万人の肺がん患者の生命予後が大きく変わろうとしている。

【文献】

- 1) Soda M, *et al.* "Identification of the transforming *EML4-ALK* fusion gene in non-small-cell lung cancer" *Nature* 448: 561-566, 2007.
- 2) Choi YL, *et al.* "Identification of novel isoforms of the *EML4-ALK* transforming gene in non-small cell lung cancer" *Cancer Res* 68: 4971-4976, 2008.
- 3) Takeuchi K, *et al.* "KIF5B-ALK, a novel fusion oncokinas identified by an immunohistochemistry-based diagnostic system for ALK-positive lung cancer" *Clin Cancer Res* 15: 3143-3149, 2009.
- 4) Soda M, *et al.* "A mouse model for *EML4-ALK*-positive lung cancer" *Proc Natl Acad Sci U S A* 105: 19893-19897, 2008.

2) 植物グリコシルトランスフェラーゼの機能進化と植物二次代謝産物の多様性

東北大学大学院工学研究科 教授 中山 亨

はじめに 植物が生産する二次代謝産物には膨大な種類があり、その数は確認されているものだけでも20万以上にも及ぶとされている。これらの化合物群の生理活性は抗菌活性、摂食阻害活性、神経作用、紫外線の吸収など多岐にわたり、ヒトの健康に好ましい活性も多数見いだされている。そうした活性の種類や強弱は化合物群の構造の多様性と密接に関連し、グリコシル化やアシル化などの修飾に大きく依存している。本講演では重要な植物二次代謝産物の一群であるフラボノイドに焦点をあて、その構造的多様性の拡大のもととなるグリコシル化（糖修飾）を司るグリコシルトランスフェラーゼ（糖転移酵素）の特異性の進化についての研究成果を紹介する。

植物二次代謝産物グリコシルトランスフェラーゼ群 (PSPG) フラボノイドのグリコシル化は、植物二次代謝産物グリコシルトランスフェラーゼ群 (PSPG) によって達成される。これらは糖ヌクレオチドを糖供与体として、植物二次代謝産物の求核基に立体反転で糖残基を転移する。バイオテクノロジー分野において、PSPGの糖転移反応の位置特異性や糖供与体特異性の制御に多大な関心が寄せられている。これまでの研究で、糖転移の位置特異性がPSPGの進化系統関係と密接な関係があることが明らかにされており、また最近、ブドウのアントシアニン-3-グルコシルトランスフェラーゼ VvGT1をはじめとするいくつかのPSPGの結晶構造が明らかにされたが、PSPGの位置特異性や糖供与体特

異性を支配する構造的基盤については依然として不明の点が多い。

ブドウのフラボノール-3-グリコシルトランスフェラーゼ (VvGT5, VvGT6) ブドウに含まれるフラボノールの3位配糖体(グルクロン酸配糖体, グルコース配糖体, ガラクトース配糖体)の生成機構を調べるため, フラボノイドの3位に特異的な系統群のPSPGをコードする遺伝子をブドウのゲノム配列に対して *in silico* でスクリーニングしたところ, 少なくとも7つの候補遺伝子 (VvGT2 - VvGT6) が同定された。これらの遺伝子は, ブドウのゲノム上では2本の異なる染色体にコードされていた。機能解析の結果, これらの遺伝子のうち VvGT5 がフラボノール3-位グルクロン酸転移酵素 (3-GAT) であり, VvGT6 は, フラボノールに対して3-グリコシルトランスフェラーゼ (3-GlcT) 活性および3-ガラクトシルトランスフェラーゼ (3-GalT) 活性の両方を示す bi-functional な酵素であることがわかった。

VvGT5 と VvGT6 の糖供与体特異性の進化
VvGT5 と VvGT6 は同じ染色体 (LG11) 上にタンデムにコードされ, DNA レベルで 91%, アミノ酸レベルで 88% と互いにきわめて高い相同性を示す。このことから一方の遺伝子は他方からの遺伝子重複によって進化したことが強く示唆された。両酵素の糖供与体特異性の違いの原因となっているアミノ酸残基を検索したところ, VvGT6 は, 変異によって GalT 活性が高まった 3-GlcT の変種であると推定され, そのような変異のひとつとして Thr19Pro (ACC→CCC) が同定された。一方, VvGT5 では UDP-グルクロン酸の認識に 140 位の Arg が重要な役割を果たしていることがわかった。同じ系統群に属する VvGT6 や他の GlcT では, VvGT5 の 140 位に対応する位置のアミノ酸は例外なく Trp となつて

おり, 酵素遺伝子の進化の過程で導入された一塩基の非同義置換 (TGG→AGG) によって糖供与体特異性が劇的に変化したものと思われた。さらに VvGT5 とは系統的に異なるデージーのアントシアニン GAT やシソのフラボン 7-GAT についても UDP-グルクロン酸に対する特異性決定基の検索が同様に行われ, いずれの GAT でも Arg 残基がその役割を果たすが, それらの1次構造上の所在は VvGT5 の場合とは異なることが示された。VvGT1 の結晶構造を鋳型にして構築したミカエリス複合体の立体構モデルの比較によれば, いずれの GAT においても, 特異性決定基は複合体中の UDP-グルクロン酸のカルボキシ基と静電相互作用しうる位置に存在することが示唆された。このことは, 異なる系統群に属する PSPG が一次構造上異なる位置への変異導入によって同一の機能を獲得するに至ったことを示しており, 酵素機能の収束進化の一例と見ることができる。

以上の結果から, VvGT5 と VvGT6 の進化について次のようなシナリオが推定された。両酵素の共通の祖先遺伝子は, おそらく 3-GlcT をコードしたであろうと考えられる。祖先遺伝子の重複後, 本体とコピーのそれぞれに固有の変異が導入され, 一方の遺伝子における非同義置換 (Trp140Arg) によって酵素は 3-GAT に変化し, もう一方の遺伝子への別の非同義置換 (Thr19Pro) によって酵素の 3-GalT 活性の活性化が達成され bi-functional な VvGT6 が生成したのであろう。

おわりに PSPG の糖転移反応の特異性を自在に制御する技術の確立に向けて, 本講演で紹介した発見はそれに至る長い道のりのなかの, ひとつの一里塚に過ぎないが, こうした知見をひとつひとつ積み重ねていくことによって, その目標に一步でも近づきたいと願っている。

第21回 加藤記念研究助成贈呈式



平田 正 理事長



山根 久和 選考委員長



石井 康彦
文部科学省研究振興局
ライフサイエンス課長



松田 譲
協和発酵キリン(株)
代表取締役社長



間野 博行 自治医科大学 教授

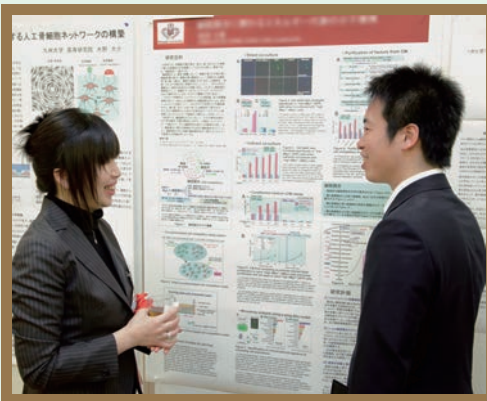


中山 亨 東北大学 教授



第21回加藤記念研究助成受領者と財団関係者

ポスターセッションと祝賀会



森 謙治 理事



6. 平成21年度収支決算報告書

収 支 計 算 書

平成21年4月1日から平成22年3月31日まで

(単位：円)

科 目	予算額	決算額	差 異
I 事業活動収支の部			
1. 事業活動収入			
① 基本財産運用収入	6,200,000	5,731,588	468,412
② 受取寄付金	76,000,000	76,000,000	0
③ 受取利息	60,000	75,741	△ 15,741
事業活動収入計	82,260,000	81,807,329	452,671
2. 事業活動支出			
① 事業費支出			
研究助成	50,000,000	50,000,000	0
国際交流助成	7,500,000	7,050,000	450,000
普及啓発費	3,000,000	2,006,080	993,920
事業促進費	11,000,000	8,547,450	2,452,550
年報出版費	5,000,000	3,104,427	1,895,573
事業費支出計	76,500,000	70,707,957	5,792,043
② 管理費支出			
会議費	1,500,000	977,257	522,743
旅費交通費	3,500,000	2,273,263	1,226,737
人件費	3,600,000	3,600,000	0
什器備品費	200,000	0	200,000
通信費・消耗品費等	1,500,000	1,552,177	△ 52,177
管理費支出計	10,300,000	8,402,697	1,897,303
事業活動支出計	86,800,000	79,110,654	7,689,346
事業活動収支差額	△ 4,540,000	2,696,675	△ 7,236,675
II 投資活動収支の部			
投資活動支出			
固定資産取得支出	500,000	525,000	△ 25,000
投資活動支出計	500,000	525,000	△ 25,000
III 財務活動収支の部	0	0	0
IV 予備費支出	500,000		
	△ 500,000	0	0
当期収支差額	△ 5,040,000	2,171,675	△ 7,211,675
前期繰越収支差額	14,150,000	20,942,150	△ 6,792,150
次期繰越収支差額	9,110,000	23,113,825	△ 14,003,825

「予備費の使用」

予備費は固定資産取得支出に充当した金額であり、当該科目の予算額に含めて表示しています。

貸借対照表

平成22年3月31日現在

(単位：円)

科 目	当年度	前年度	増減
I 資産の部			
1 流動資産			
現金預金	23,178,053	40,977,821	△ 17,799,768
流動資産合計	23,178,053	40,977,821	△ 17,799,768
2 固定資産			
(1)基本財産			
普通預金	50,000,000	81,000,000	△ 31,000,000
定期預金	256,000,000	225,000,000	31,000,000
投資有価証券	400,000,000	400,000,000	0
基本財産合計	706,000,000	706,000,000	0
(2)その他固定資産			
ソフトウェア	507,500	0	507,500
その他固定資産合計	507,500	0	507,500
固定資産合計	706,507,500	706,000,000	507,500
資産合計	729,685,553	746,977,821	△ 17,292,268
II 負債の部			
1 流動負債			
未払金	64,228	20,035,671	△ 19,971,443
流動負債合計	64,228	20,035,671	△ 19,971,443
負債合計	64,228	20,035,671	△ 19,971,443
III 正味財産の部			
1 指定正味財産			
寄付金	706,000,000	706,000,000	0
指定正味財産合計	706,000,000	706,000,000	0
(うち基本財産への充当額)	(706,000,000)	(706,000,000)	(0)
(うち特定資産への充当額)	(0)	(0)	(0)
2 一般正味財産	23,621,325	20,942,150	2,679,175
(うち基本財産への充当額)	(0)	(0)	(0)
(うち特定資産への充当額)	(0)	(0)	(0)
正味財産合計	729,621,325	726,942,150	2,679,175
負債及び正味財産合計	729,685,553	746,977,821	△ 17,292,268

正味財産増減計算書

平成21年4月1日から平成22年3月31日まで

(単位：円)

科 目	当年度	前年度	増減
I 一般正味財産増減の部			
1. 経常増減の部			
(1) 経常収益			
① 基本財産運用益			
基本財産受取利息	5,731,588	6,889,249	△ 1,157,661
② 受取寄付金			
受取寄付金	76,000,000	90,000,000	△ 14,000,000
③ 雑収益			
受取利息	75,741	124,851	△ 49,110
経常収益計	81,807,329	97,014,100	△ 15,206,771
(2) 経常費用			
① 事業費	70,707,957	80,433,551	△ 9,725,594
研究助成	50,000,000	59,000,000	△ 9,000,000
国際交流助成	7,050,000	7,348,716	△ 298,716
普及啓発費	2,006,080	3,361,885	△ 1,355,805
事業促進費	8,547,450	9,540,172	△ 992,722
年報出版費	3,104,427	1,182,778	1,921,649
② 管理費	8,420,197	8,867,377	△ 447,180
会議費	977,257	1,057,361	△ 80,104
旅費交通費	2,273,263	2,798,257	△ 524,994
人件費	3,600,000	3,600,000	0
通信費・消耗品費等	1,552,177	1,411,759	140,418
減価償却費	17,500	0	17,500
経常費用計	79,128,154	89,300,928	△ 10,172,774
当期経常増減額	2,679,175	7,713,172	△ 5,033,997
2. 経常外増減の部			
(1) 経常外収益	0	0	0
(2) 経常外費用	0	0	0
当期経常外増減額	0	0	0
当期一般正味財産増減額	2,679,175	7,713,172	△ 5,033,997
一般正味財産期首残高	20,942,150	13,228,978	7,713,172
一般正味財産期末残高	23,621,325	20,942,150	2,679,175
II 指定正味財産増減の部			
当期指定正味財産増減額	0	0	0
指定正味財産期首残高	706,000,000	706,000,000	0
指定正味財産期末残高	706,000,000	706,000,000	0
III 正味財産期末残高	729,621,325	726,942,150	2,679,175

財 産 目 録

平成 22 年 3 月 31 日現在

(単位：円)

科 目	金 額	額
I 資産の部		
1 流動資産		
現金預金		
現金手許有高	51,547	
普通預金		
みずほ銀行丸之内支店	2,274,864	
みずほ銀行相模大野支店	17,327,163	
三菱東京UFJ銀行新橋支店	3,524,479	
流動資産合計		23,178,053
2 固定資産		
(1)基本財産		
普通預金		
みずほ銀行丸之内支店	50,000,000	
定期預金		
三菱UFJ信託銀行本店	156,000,000	
三菱東京UFJ銀行新橋支店	100,000,000	
投資有価証券		
農林中央金庫債券 2件	400,000,000	
基本財産合計	706,000,000	
(2)その他固定資産		
ソフトウェア	507,500	
その他固定資産合計	507,500	
固定資産合計		706,507,500
資産合計		729,685,553
II 負債の部		
1 流動負債		
未払金		
通信運搬費等に対する未払額	64,228	
流動負債合計		64,228
負債合計		64,228
正味財産		729,621,325

Ⅱ. 平成 22 年度事業計画

平成 22 年度事業は、平成 22 年 2 月 4 日開催の第 43 回理事会・評議員会にて審議の上承認された事業計画及び事業予算に基づき実施する。

助成事業は、一部について見直しを図るが、基本的に前年度と同規模で実施する。研究助成については、前年度応募状況を考慮し、助成総数は同じながらも採択率の平準化を図る。国際交流助成については、次年度上期分の内定手続きを本年度内に実施できる体制とする。

また初めての試みとして、第 19 回研究助成者による第 1 回研究助成報告・交流会を開催する。

公益財団法人への移行申請は、予定通り、平成 23 年 3 月までに行う前提で、各種準備を進める。

1. 事業計画

(1) 第 22 回 (平成 22 年度) 研究助成事業

1) 「研究助成」

- 助成対象者： メディカルサイエンス分野およびバイオテクノロジー分野の研究者
 助成金額： 総額 4,400 万円 (1 件 200 万円、メディカルサイエンス分野 12 件、
 バイオテクノロジー分野 10 件)
 応募資格： 年齢 男性 40 才以下、女性 45 才以下の国内在住の研究者
 推薦 申請者の所属する機関の長又は理事・評議員
 応募期間： 平成 22 年 6 月初旬～8 月 31 日
 助成金の贈呈式： 平成 23 年 3 月 4 日 (金)

2) 「指定研究助成」

- 研究課題： 「癌分野における基礎研究から臨床への橋渡し研究」
 助成対象者： 指定研究課題に該当する研究者
 助成金額： 総額 600 万円 (1 件 200 万円、3 件)
 応募資格： 年齢 男性 45 才以下、女性 50 才以下の国内在住の研究者
 推薦： 申請者の所属する機関の長又は理事・評議員
 応募期間： 平成 22 年 6 月初旬～8 月 31 日

(2) 第 22 回国際交流助成事業

- 助成対象者： 海外で開催されるバイオサイエンス分野の学会、シンポジウム等で自己
 の研究成果を発表する者
 助成金額： 上期 総額 450 万円
 下期 総額 300 万円
 応募資格： 年齢 35 歳 (医歯学系卒業者は 37 歳) 以下の国内在住の研究者
 推薦 申請者の所属する研究機関の上長
 応募期間： 上期 平成 22 年 1 月 8 日～2 月 28 日 (4 月～9 月までの学会対象)

下期 平成 22 年 6 月初旬～8 月 31 日 (10 月～翌年 3 月までの学会対象)

(3) 第 22 回学会等開催助成事業

助成対象： 国内で開かれるバイオサイエンス分野の学会等
助成金額： 総額 200 万円 (1 件 20 万円程度、10 件程度)
応募資格： 規模 参加者数は原則 1,000 名以下
推薦 理事又は評議員
応募期間： 平成 22 年 10 月 1 日～10 月 31 日

(4) 第 1 回研究助成報告・交流会

概要： 第 19 回研究助成者を中心とした研究成果報告と交流
時期： 10 月 22 日
予算： 150 万円

(5) 第 22 回加藤記念研究助成贈呈式

時期： 3 月 4 日
場所： 如水会館
予算： 350 万円

(6) 財団年報 (第 11 号) 発行

目的： 平成 21 年度の活動の記録と情報公開。一部は HP にも掲載する。
時期： 7 月頃
予算： 50 万円

(7) 公益財団法人への移行申請

時期： 平成 23 年 3 月
準備： 財団の理念・事業の再確認、新定款 (案)・各種規程類 (案) の作成、
最初の評議員の選任、申請に必要な各種書類の作成、等。

2. 平成 22 年度事業予算

平成 22 年度 正味財産増減予算書

平成 22 年 4 月 1 日から平成 23 年 3 月 31 日

(単位：円)

科 目	H22 予算
I 一般正味財産増減の部	
1. 経常増減の部	
(1) 経常収益	
① 基本財産運用益	
基本財産受取利息	5,600,000
② 受取寄付金	
受取運用財産	72,000,000
③ 雑収益	
運用財産受取利息	70,000
経常収益計	77,670,000
(2) 経常費用	
① 事業費	71,000,000
支払助成金	59,500,000
研究助成	(50,000,000)
国際交流助成	(7,500,000)
学会等開催助成	(2,000,000)
会議費	3,050,000
諸謝金	3,850,000
旅費交通費	2,900,000
印刷製本費	500,000
消耗品費	700,000
通信運搬費	150,000
雑費	350,000
② 管理費	9,905,000
人件費	3,600,000
会議費	1,500,000
旅費交通費	3,000,000
印刷製本費	400,000
消耗品費	300,000
通信運搬費	250,000
会費	300,000
什器備品費	200,000
減価償却費	105,000
雑費	250,000
経常費用計	80,905,000
当期経常増減額	△ 3,235,000
2. 経常外増減の部	
(1) 経常外収益	0
(2) 経常外費用	0
当期経常外増減額	0
当期一般正味財産増減額	△ 3,235,000
一般正味財産期首残高	23,621,325
一般正味財産期末残高	20,386,325
II 指定正味財産増減の部	
当期指定正味財産増減額	0
指定正味財産期首残高	706,000,000
指定正味財産期末残高	706,000,000
III 正味財産期末残高	726,386,325

平成 22 年度より会計基準を平成 20 年基準(平成 20 年 4 月内閣府公益認定等委員会)に変更し、予算書の形式を従来の収支予算書形式から正味財産増減計算書形式に変更すると共に、科目設定を変更した。

3. 平成 22 年度就任の財団役員等

平成 22 年度は、理事、監事、評議員については 2 年任期の 2 年目であり、改選はない。

また平成 21 年度末に選考委員 2 名が任期満了により退任するのに伴い、平成 22 年度に新たに就任する選考委員は下記のとおりである。選考委員総数 20 名は変わらない。

新任選考委員	佐藤隆一郎	東京大学大学院農学生命科学研究科教授
	高橋 淑子	奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス科教授

平成 22 年 4 月 1 日付

Ⅲ. 助成者からの報告

1. 第 19 回研究助成報告（研究期間：平成 20 年 4 月～平成 22 年 3 月）

当財団では、助成対象となった 2 年間の研究の終了時に成果報告を受けている。以下に第 19 回（平成 19 年度）の研究助成金受領者（以下、助成者）の名簿および報告書を掲載する。（所属は平成 22 年 3 月現在）

なお、この研究報告内容は国立情報研究所の民間助成研究成果概要データベースに登録している。
http://dbr.nii.ac.jp/infolib/meta_pub/G9200001CROSS

第 19 回研究助成者一覧

（1） メディカルサイエンス分野（11 名）

氏名	所属機関	研究題目	ページ
内村 健治	国立長寿医療センター研究所 アルツハイマー病研究部	老人斑ケラタン硫酸の生合成およびアルツハイマー病発症に関する基礎研究	32
生沼 泉	京都大学大学院生命科学研究科 生体システム学分野	ガイダンス分子の情報伝達における R-Ras の普遍的で新しい分子機構の解明	34
大内田 研宙	九州大学大学院医学研究院 先端医療医学講座	膵癌における microRNA 発現とその機能；早期膵液診断、分子標的を基盤とした個別化治療への応用	36
片山 義雄	神戸大学医学部附属病院 血液内科	荷重による造血調節機構の解明	38
佐藤 浩二郎	埼玉医科大学医学部 リウマチ膠原病科	システムバイオロジー的アプローチによる T 細胞・破骨細胞活性化機構の比較解析	40
田中 信忠	昭和大学薬学部 分析センター	ホスミドマイシン標的酵素の立体構造に基づく新規抗マラリア薬の創製	42
日野 真一郎	宮崎大学医学 解剖学講座 分子細胞生物学分野	小胞体ストレス制御による神経変性疾患の治療戦略開発	44
牧野 雄一	旭川医科大学内科学講座 病態代謝内科学分野	低酸素応答性転写制御装置の発現調節機構の解明と疾患治療への応用	46
山内 淳司	国立成育医療センター研究所 薬剤治療研究部分子薬理研究室	感覚神経ニューロパチーに関与するシグナル伝達経路の解明とその治療標的分子の同定	48
吉田 清嗣	東京医科歯科大学 難治疾患研究所分子遺伝分野	レドックス制御における細胞質—核クロストーク機構とアポトーシス誘導	50
和多 和宏	北海道大学大学院 先端生命科学研究院 先端生体制御科学分野	言語野機能部位同定を目指した遺伝子プローブの探索：ソングボードを用いた先導的研究	52

(2) バイオテクノロジー分野 (11名)

氏名	所属機関	研究題目	ページ
井上 将行	東京大学大学院薬学系研究科 有機反応化学教室	天然神経毒の構造利用による生体組織の光制御	54
大平 剛	神奈川大学理学部生物科学科	クルマエビの成熟促進ホルモンの精製と構造解析	56
小野 昌弘	Institute of Child Health University College London	制御性 T 細胞の免疫反応抑制機能に着目した、免疫抑制活性をもつ miRNA の探索	58
川崎 善博	東京大学分子細胞生物学研究所 分子情報研究分野	細胞内シグナル伝達経路における癌抑制遺伝子産物 APC の機能解析	60
栗栖 源嗣	大阪大学蛋白質研究所 蛋白質結晶学研究室	植物が持つ機能的還元力分配システムとその分子装置の構造研究	62
櫻井 香里	東京農工大学大学院 共生科学技術研究院	癌抑制転写因子 p53 由来 α -ヘリックスペプチドを基盤とする癌蛋白質阻害剤の創製	64
佐藤 隆史	群馬大学生体調節研究所 細胞構造分野	培養細胞を用いた細胞極性に関する新規遺伝子の同定	66
塩見 美喜子	慶應義塾大学医学部 分子生物学教室	マウス Argonaute 蛋白質に対する特異抗体を用いた RNAi 経路の解析	68
高岡 晃教	北海道大学遺伝子病制御研究所 分子生体防御分野	分子パターン認識機構に着目したバイオセンサーの開発と応用を目指した基礎研究	70
徳山 英利	東北大学大学院薬学研究科 創薬化学専攻	多環性高次構造を有するアルカロイド類の合成研究	72
沼田 倫征	産業技術総合研究所 生物機能工学研究部門 機能性核酸研究グループ	忠実なタンパク質合成に不可欠な tRNA 修飾塩基の生合成機構の分子的基盤	74

(3) 奨励研究助成 (6名)

氏名	所属機関	研究題目	ページ
秋田 英万	北海道大学大学院薬学研究院	細胞内動態と血中分散性制御に基づく in vivo 用遺伝子キャリアの構築	76
小川 拓哉	奈良先端科学技術大学院大学 バイオサイエンス研究科 細胞増殖学講座	非必須アミノ酸 L-セリンの新規アナログによる骨粗鬆症改善法の開発	78
土反 伸和	神戸薬科大学生薬化学研究室	プレニル化芳香族輸送蓄積機構の解明 と大量生産への基盤構築	80
大道寺 智	大阪大学微生物病研究所 感染症国際研究センター	組み換えニューカッスル病ウイルスを用いた呼吸器感染症に対する新たな予防法の開発	82
堀之内 正枝	理化学研究所基幹研究所 長田抗生物質研究室	ステロイド分解菌のコール酸分解中間体と分解遺伝子の解析	84
牧野 利明	名古屋市立大学大学院 薬学研究科生薬学分野	流入型トランスポーターを介する機能性食品と医薬品間の相互作用	86

2. 第 21 回国際交流助成報告

国内で実施された研究の成果を、平成 21 年 4 月から 22 年 3 月の間に海外で開催された学会等で発表する研究者に対して、渡航費等の助成を行なった。以下にその助成金受領者(以下、助成者)名簿および参加報告書を掲載する。(所属は報告書提出時のもの)

第 21 回国際交流助成者一覧

上期 (10 名)

氏名	所属機関名	学会名	ページ
岩室 宏一	自然科学研究機構 生理学研究所 生体システム研究部門	13th International Congress of Parkinson's Disease and Movement Disorders	90
金井 将昭	大阪大学大学院医学系研究科 生化学・分子生物学講座 分子再生医学	12th Meeting of the international society for Tryptophan Research	91
金澤 雅人	新潟大学脳研究所 神経内科学教室	2009 Annual meeting, American Academy of Neurology,	92
木村 俊秀	大分大学医学部薬理学教室	45th European Association for the Study of Diabetes Annual Meeting	93
倉林 伸博	東京大学大学院理学系研究科 生物化学専攻	XI. Congress of the European Biological Rhythm Society	94
杉浦 真由美	神戸大学大学院理学研究科 生物学専攻	XIII International Congress of Protistology	95
竹田 典代	筑波大学大学院 生命環境科学研究科 下田臨海実験センター	Developmental Biology of the sea urchin XIX	96
中川 正宏	東京大学大学院医学系研究科 血液・腫瘍内科	“EMBO WORKSHOP” RUNX Transcription Factors in Development & Disease	97
柳川 正隆	京都大学大学院理学研究科 生物物理学教室 分子生体情報学分野	15th International Congress on Photobiology	98
渡邊 麻衣	東京大学大学院 総合文化研究科広域科学専攻	The 13th International Symposium on Phototrophic Prokaryotes	99

下期 (18 名)

申請者氏名	所属機関名	学会名	ページ
Azran Azhim	東京電機大学 フロンティア共同研究センター	2009 IEEE Symposium on Industrial Electronics and Applications-Biomedical & Computational Biology	100
伊藤 陽子	横浜市立大学大学院 国際総合科学研究科 生体超分子科学専攻	Gordon Research Conferences on Sensory Transduction in Microorganisms	101
王 晨	山口大学大学院医学系研究科 器官制御分子学専攻	49th American Society for Cell Biology Annual Meeting	102
大河内 直子	東京大学医学部附属病院 輸血部	The 51st annual meeting of the American Society of Hematology	103

片山 貴博	北海道大学大学院薬学研究院 薬理学研究室	Neuroscience 2009 (39th annual meeting of the Society for Neuroscience)	104
塩田 倫史	東北大学大学院薬学研究科 薬理学分野	Neuroscience 2009 (39th annual meeting of the Society for Neuroscience)	105
田中 暢明	京都大学生命科学系キャリアパス形成ユニット	Swiss Neurofly and Satellite Meeting	106
田中 瑠璃子	京都大学医学部附属病院 輸血細胞治療部	The 51st annual meeting of the American Society of Hematology	107
田村 雄一	慶應義塾大学大学院 医学研究科内科学専攻	American Heart Association Scientific Sessions 2009	108
野下 浩二	秋田県立大学生物資源科学部 生物生産科学科 生物活性物質分野	Fifth Asia Pacific Conference on Chemical Ecology	109
野村 洋	東京大学大学院薬学系研究科 薬品作用学教室	Neuroscience 2009, Eighth Annual MCCS meeting	110
原 哲也	神戸大学大学院医学研究科 内科学講座循環器内科学分野	American Heart Association Scientific Sessions 2009	111
丸山 史人	東京工業大学大学院 生命理工学研究科 生命情報専攻	ProkaGENOMICS2009 (4th European Conference on Prokaryotic Genomics)	112
村松 里衣子	大阪大学大学院医学系研究科 附属子どものこころの分子統御機構研究センター	Neuroscience 2009 (39th annual meeting of the Society for Neuroscience)	113
谷田部 淳一	福島県立医科大学医学部 腎臓高血圧・糖尿病内分泌代謝内科学講座	Renal Week 2009, 42nd Annual Meeting of the American Society of Nephrology	114
山田 真吏奈	慶應義塾大学医学部 解剖学教室	Neuroscience 2009 (39th annual meeting of the Society for Neuroscience)	115
山本 伸一郎	京都大学大学院薬学研究科 生体分子認識学分野	Biophysical Society 54th Annual Meeting	116
渡部 裕	新潟大学医学部循環器内科	American Heart Association Scientific Sessions 2009	117

IV. 平成 21 年度の財団の運営と組織

1. 財団の概要

名 称	財団法人 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団 Kato Memorial Bioscience Foundation
設立許可日	1988 年 12 月 23 日
主務官庁	文部科学省
特定公益増進法人許可	平成 21 年 12 月 14 日更新
基本財産	7 億 6 百万円（平成 22 年 3 月 31 日現在）
出 捐 者	協和発酵キリン株式会社 東京都千代田区大手町 1-6-1 大手町ビル

2. 設立の趣意

資源の乏しい我が国が今後も繁栄を持続していくには、科学技術の発展が不可欠であります。近年、ゲノムやプロテオーム科学などの先端技術や、それを駆使した細胞レベルの研究など、バイオサイエンスの進歩には目覚ましいものがあります。近い将来、この分野で飛躍的な進歩を達成しうるならば、それは我が国の発展のみならず、医療・食糧・環境など地球規模の課題に対しても大きく貢献することが期待できます。

しかし、その実現は容易に成就できるものではなく、長期の視野に立った基礎研究から応用研究まで総合的に推進することが求められます。また、真に価値ある先駆的研究は、個性的で創造性豊かな研究者により、既存の制約を越えた環境下、粘り強い努力の結果、生み出されるものと考えられます。従って、創造的研究を遂行するには、創造的研究の芽を絶やすことなく培うとともに、研究者に対する精神的な援助のみならず、研究の維持継続のための資金的な助成、若い有為な研究者の育成、並びに国際的な学術交流が強く望まれることは言うまでもありません。

協和発酵工業株式会社の創立者である加藤辨三郎氏は、「バイオサイエンスとテクノロジーの進歩を通して企業活動を発展させるとともに科学技術振興を図り、社会の発展と人類の福祉に貢献する」ことを経営理念としておりました。加藤氏は、昭和 58 年（1988 年）永眠しましたが、40 年余におよぶ会社経営の他に、我が国の多くの科学技術委員会などに関与した体験を通して、バイオサイエンス振興の一層の必要性を強調しておりました。

協和発酵工業株式会社は、こうした加藤氏の遺志をつぎ、また総合的かつ領域横断的にバイオサイエンス研究を振興することの重要性を認識し、同社創立 40 周年記念事業の一環として、昭和 63 年（1988 年）12 月 23 日、財団法人加藤記念バイオサイエンス研究振興財団を設立いたしました。

3. 目 的

（寄附行為第 3 条）

この法人は、バイオサイエンスの分野における研究者に対する助成ならびにシンポジウム・研究会の開催・助成を行なうことにより、科学技術の振興をはかり、もって社会経済の発展に寄与すること

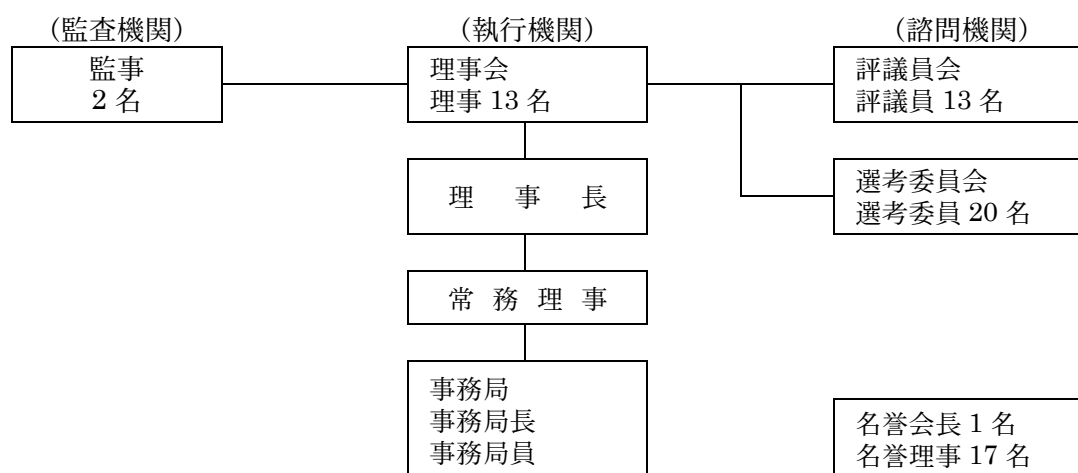
を目的とする。

(寄附行為第4条)

この法人は、前条の目的を達成するために、次の事業を行なう。

- (1) バイオサイエンスおよびこれに関連する分野における研究者に対する助成
- (2) バイオサイエンスおよびこれに関連する分野における研究者の国際交流の助成
- (3) バイオサイエンスおよびこれに関連する分野におけるシンポジウム・研究会の開催および助成
- (4) その他目的を達成するために必要な事業

4. 組織 (平成21年4月1日現在)



5. これまでの助成実績

(1) 研究助成

回	年度 (平成)	応募件数	助成者数		助成額(万円)	
			各年度	累計	各年度	累計
第1回	元年	18	15	15	3,120	3,120
第2回	2年	96	18	33	3,600	6,720
第3回	3年	100	20	53	4,000	10,720
第4回	4年	122	24	77	4,320	15,040
第5回	5年	103	20	97	4,000	19,040
第6回	6年	104	20	117	4,000	23,040
第7回	7年	102	20	137	4,000	27,040
第8回	8年	112	20	157	4,000	31,040
第9回	9年	104	20	177	4,000	35,040
第10回	10年	109	22	199	4,400	39,440
第11回	11年	96	22	221	4,400	43,840
第12回	12年	113	22	243	4,400	48,240
第13回	13年	101	23	266	4,600	52,840
第14回	14年	100	22	288	4,400	57,240
第15回	15年	106	23	311	4,600	61,840
第16回	16年	117	23	334	4,600	66,440
第17回	17年	102	23	357	4,600	71,040
第18回	18年	171	28	385	5,000	76,040
第19回	19年	182	28	413	5,000	81,040
第20回	20年	252	31	444	5,900	86,940
第21回	21年	251	25	469	5,000	91,940

(2) 国際交流助成

回数	年度 (平成)	応募件数	助成者数		助成額(万円)	
			各年度	累計	各年度	累計
第1回	元年	15	10	10	300	300
第2回	2年	52	10	20	300	600
第3回	3年	45	15	35	450	1,050
第4回	4年	95	26	61	600	1,650
第5回	5年	89	22	83	575	2,225
第6回	6年	102	24	107	600	2,825
第7回	7年	97	26	133	600	3,425
第8回	8年	83	30	163	745	4,170
第9回	9年	108	31	194	740	4,910
第10回	10年	114	33	227	750	5,660
第11回	11年	71	32	259	760	6,420
第12回	12年	72	32	291	750	7,170
第13回	13年	78	31	322	715	7,885
第14回	14年	63	33	355	735	8,620
第15回	15年	70	33	388	745	9,365
第16回	16年	63	32	420	750	10,115
第17回	17年	64	30	450	740	10,855
第18回	18年	50	30	480	715	11,570
第19回	19年	74	35	515	740	12,310
第20回	20年	121	31	546	735	13,045
第21回	21年	63	28	574	705	13,750

(3) 学会等開催助成

回	年度 (平成)	助成件数		助成額(万円)	
		各年度	累計	各年度	累計
第1回	2年	3	3	90	90
第2回	3年	4	7	80	170
第3回	4年	5	12	100	270
第4回	5年	5	17	100	370
第5回	6年	6	23	100	470
第6回	7年	5	28	100	570
第7回	8年	5	33	100	670
第8回	9年	7	40	110	780
第9回	10年	5	45	100	880
第10回	11年	7	52	100	980
第11回	12年	5	57	100	1,080
第12回	13年	5	62	100	1,180
第13回	14年	5	67	100	1,280
第14回	15年	5	72	100	1,380
第15回	16年	5	77	100	1,480
第16回	17年	5	82	100	1,580
第17回	18年	7	89	140	1,720
第18回	19年	6	95	120	1,840
第19回	20年	5	100	100	1,940
第20回	21年	10	110	200	2,140

V. 平成 21 年度募集要項

第 21 回（2009 年度）加藤記念研究助成募集要項（2009 年度改定）

1. 助成の趣旨

本研究助成は、バイオサイエンス分野における有能な若手研究者を発掘し、その創造的かつ先駆的研究を支援することを目的としています。

2. 助成対象研究領域・課題

(1) 研究助成

①「メディカルサイエンス分野」（下記指定研究を除く）（以下は例示）

- ・ヒトを含む哺乳動物の個体、器官、組織、細胞或いは生体分子を用い、その生理・薬理・病理現象等を解析しようとする研究。
- ・臨床応用を目指した基礎研究。
- ・病態診断技術の開発及びその基礎となる研究。
- ・人体組織の再生を目指した基礎及び応用研究。

②「バイオテクノロジー分野」（以下は例示）

- ・微生物、植物、動物等の機能を解析・利用することによって物質生産に繋げようとする研究。
- ・生理活性物質・有用物質の探索、構造解析、合成等に関する研究。
- ・食品の機能や栄養に関する研究。
- ・環境・エネルギー等に関わる生物材料や生物機能等を利用した研究。

(2) 指定研究助成

「癌分野における基礎研究から臨床への橋渡し研究（Translational Research）」

3. 応募資格

国内の大学又は公的研究機関に所属し、年齢（8月31日現在）が以下の研究者とします。

(1) 研究助成：男性は 40 才以下、女性は 45 才以下

(2) 指定研究助成：男性は 45 才以下、女性は 50 才以下

但し、以下いずれかに該当する方／研究は対象外とします。

- ①学生、大学院生
- ②過去に本助成を受領し 3 年間経過していない人（第 18 回以降の助成（2007 年 4 月以降研究開始）を受けた方は対象外）
- ③当財団選考委員と同一研究室に所属する人
- ④国外での研究
- ⑤同一研究課題（実質的同一を含む）に対し本年度に年間 1,000 万円以上の公的助成（科研費等）又は当財団助成金額を超える助成金を他財団等から受ける人

4. 助成金額

合計 25 件、総額 5,000 万円、その内容は以下の通りです。

(1) 研究助成（総額 4,000 万円）

メディカルサイエンス分野・バイオテクノロジー分野：各 10 件、1 件 200 万円

(2) 指定研究助成（総額 1,000 万円）

5 件、1 件 200 万円

5. 応募方法

当財団所定の書式により、下記の書面をご提出ください。書式はいずれも財団ホームページよりダウンロード可能です。

○ 書面提出

- ・「申請書」 正1通（片面印刷）、副3通（両面印刷。正の白黒両面コピーで可。）
- ・「推薦書」 正1通、副3通（正の白黒コピーで可。）

○ メール添付で提出

- ・「申請概要」 エクセル表に記載して、ファイル名を変更し、メール添付送信（メール件名：研究助成申請（氏名）、ファイル名：研究助成申請(氏名).xls)

※ 応募に際しては、「メディカルサイエンス分野」、「バイオテクノロジー分野」、又は「指定研究」のいずれか一つを選択下さい。

6. 推薦者

推薦者は以下の通りですが、各推薦者1件の推薦とします（複数の組織長兼務の場合は各組織長名で推薦可能）。

- (1) 国公立・私立総合大学：学部長、大学院研究科長又は研究所長
- (2) 単科大学：学長
- (3) 国公立研究所及びその他実験施設：研究機関の長
- (4) 当財団の理事又は評議員

7. 募集開始と応募締切日

募集開始：6月22日

応募締切日：2009年8月31日（当日消印可）

8. 選考及び決定

2009年12月に開催の当財団選考委員会で選考の上、2010年2月開催の評議員会の同意を得て理事会で決定します。

なお、同等水準が採択数を超える場合、選考基準として以下を考慮します。

- ① 新設・小規模の研究機関を優先する。
- ② 女性研究者を優先する。
- ③ 若手研究者を優先する。
- ④ 地域性を考慮する。

9. 採否通知

2010年2月28日までに申請者及び推薦者に通知します。

10. 助成金の贈呈

(1) 贈呈式

2010年3月5日（金）に贈呈式を行い、目録・記念盾を贈呈します。助成決定者は必ずご出席下さい。（如水会館：東京都千代田区一ツ橋2-1-1にて開催予定。旅費など支給。）

(2) 助成金贈呈方法

2010年3月末までに助成決定者が指定する本人又は所属研究室等の銀行口座に振り込みますが、助成決定者本人の領収書を提出いただきます（当財団は奨学寄附金等の形態を採りませんのでご注意ください）。なお、本助成の条件に従うとの前提で、助成決定者が所属機関に奨学寄附金等として再寄附のうえ利用することは認めます。

11. 助成金の使途

助成金の使途は、申請書記載の研究課題の実施に限定しますが、研究に直接要する物品の購入費用に限定しません。但し、研究機関又は研究室全体の間接経費・一般管理費（オーバーヘッド）は助成の対象として認めていません。使用期間は2010年4月1日～2012年3月31日の期間内とします。

万一途中で使途変更の必要が生じた場合は、当財団の事前承認を得てください。

12. 研究成果等の報告

- (1) 2012年3月末迄に所定書式（当財団より同年2月送付予定）に本助成金で実施した研究成果の概要を1000字～1200字に纏めた報告書を当財団宛に提出下さい。この報告書は文部科学省国立情報学研究所のデータベースに民間助成財団の資料として提供・登録し、且つ当財団の年報等に掲載します。
- (2) 2012年4月末までに助成金使途に関する収支報告書（主要費目の証拠書類添付）を当財団宛に提出下さい。
- (3) 本研究の成果発表に際しては、(財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団（英文では Kato Memorial Bioscience Foundation）の助成を受けた旨を、書き添えて下さい。

13. その他

- (1) 本助成に関して取得した個人情報は、財団ホームページ掲載の「個人情報の取扱いについて」に従い、本助成に必要な業務に限定して利用させていただきます。
- (2) 助成決定者については、当財団ホームページ、財団年報や報道機関その他により、氏名、所属機関、職名、助成対象となった研究題目等を公表します。
- (3) 提出された申請関係書類は、採否にかかわらず返却しません。
- (4) 助成者の方は研究期間内において所属研究機関に変更があった場合は、必ず当財団宛届出をお願いします。

第 21 回（平成 21 年度）加藤記念国際交流助成募集要項

1. 助成対象者：

平成 21 年 4 月 1 日から平成 22 年 3 月 31 日の期間に海外で開催されるバイオサイエンス分野の学会、シンポジウム等で自己の研究成果を発表する日本国内在住の研究者。

前期（4/1～9/30 の発表）および、後期（10/1～翌年 3/31 の発表）の 2 回に分けて公募する。

2. 申込資格：

応募締切日に 35 歳以下の方（医歯学系の大学卒業者は 37 歳以下の方）。

①応募は 1 教室（研究室）から 1 件。（年間）

②本財団から過去 3 年以内に助成（研究助成を含む）を受けた方は対象外。

3. 推薦者：

申請者の現所属機関またはその研究が行われた機関の上長（学部長、主任教授、研究指導教官など）。推薦は 1 名に限ります。

4. 助成内容：

渡航経費（旅費・滞在費・参加費）の一部を援助。

5. 助成金額：

年間予算総額 750 万円。（前期後期合わせて 30 件程度）。

《渡航地域別の 1 件当たり助成金額（目安）》

- ・ 欧州・南米・アフリカ： 30 万円
- ・ 北米(東部)・メキシコ： 25 万円
- ・ ロシア・西南アジア： 25 万円
- ・ 北米(西部)・オセアニア・インド： 20 万円
- ・ 東南アジア： 15 万円
- ・ 東アジア（中国・韓国・台湾）： 10 万円

※予算・選考状況により多少変動する場合があります。

6. 応募方法：

当財団所定の申請書に必要事項を記入の上、正本 1 部とそのコピー 3 部（合計 4 部）を郵送で事務局までお送り下さい。同時に電子申請概要（エクセル）を、メールに添付して事務局まで送信ください。

7. 応募期間：

①前期（4/1～9/30 の発表）；

本要項発表時（2 月 20 日前後）から平成 21 年 3 月 31 日（消印有効）。

【前期は例年より募集期間が早くなっていますのでご注意ください】

②後期（10/1～翌年 3/31 の発表）；平成 21 年 7 月 1 日から 8 月 31 日（消印有効）。

8. 審査方法：

当財団の選考委員による審査の上、評議員会議長および理事長の承認を得て決定。

9. 採否の通知：

- ①前期 ; 4月下旬に申請者に通知。
- ②後期 ; 9月下旬に申請者に通知。

10. 申請書：

財団ホームページ (<http://www.katokinen.or.jp/>) より申請書(ワード) および電子申請概要(エクセル) をダウンロードしてください。

11. 報告書提出：

助成を受けた方は、帰国後1ヶ月以内にA4 1枚程度の報告書を提出して下さい。当財団の「財団年報」等に掲載する予定です。

12. 情報公開：

助成が決定した場合、氏名、所属機関、職名、参加学会名、演題等をホームページ等により公開します。

平成 21 年度（平成 22 年度開催）第 21 回学会等開催助成募集要項

1. 助成対象

2010 年度（平成 22 年 4 月～平成 23 年 3 月）に国内で開催されるバイオサイエンス分野の学会、シンポジウム等。ただし以下全ての条件を満たすもの。

- ・ 原則として参加者が 1,000 人以下のもの
- ・ クローズドな会でなく外部／新たな参加者を認めるもの
- ・ 当財団の理事・評議員・選考委員が責任者又はそれに準ずる立場にないもの

2. 助成金額

1 件 20 万円、10 件（総額 200 万円）

3. 応募期間

2009 年 10 月 1 日～30 日（当日消印有効）

4. 応募方法

当財団理事又は評議員の推薦が必要（各人 1 件の推薦枠）。

※ 応募の詳細、申請書式については財団事務局までお問い合わせ下さい。適当な推薦者がいない場合は、申請書受理後、事務局で理事・評議員に推薦可否を確認します。

5. 選考及び決定

財団選考委員による選考会の結果について、評議員会議長の承認後、理事長が決裁。

応募数が採択枠を超えた場合、選考基準として以下を考慮する。

- ① 新設・小規模のものを優先
- ② 今後の発展性が高いものを優先
- ③ 定期開催等の実績少ないものを優先
- ④ 過去に本助成を受けた回数の少ないものを優先

6. 採否通知

2010 年 2 月 28 日までに申請者及び推薦者に通知します。

7. 結果報告

開催後、財団事務局宛に講演要旨集及び報告書（1 枚程度で可）を提出。

（注）平成 22 年度事業内容および最新情報については財団ホームページをご参照下さい。

特に助成申請を検討されている方はご注意ください。

URL:<http://www.katokinen.or.jp>

VI. 平成 21 年度財団役員等

理 事 長	平 田 正	協和発酵キリン(株)名誉相談役
常 務 理 事	高 橋 充	協和発酵キリン(株)嘱託
理 事	大 塚 榮 子	北海道大学名誉教授 産業技術総合研究所
	大 村 智	(学)北里研究所名誉理事長 北里大学名誉教授
	折 茂 肇	健康科学大学学長
	垣 添 忠 生	国立がんセンター名誉総長 日本対がん協会会長
	香 川 靖 雄	自治医科大学名誉教授 女子栄養大学副学長
	岸 本 忠 三	大阪大学大学院生命機能研究科教授
		(財)千里ライフサイエンス振興財団理事長
	木 村 光	京都大学名誉教授 (株)グリーンバイオ代表取締役
	郷 通 子	情報・システム研究機構理事
	高 久 史 麿	東京大学名誉教授 自治医科大学学長
	別 府 輝 彦	東京大学名誉教授
	森 謙 治	東京大学名誉教授
監 事	伊 藤 醇	公認会計士
	樋 口 節 夫	新日本有限責任監査法人
		監査一部シニアパートナー 公認会計士
評 議 員	小 川 秀 興	順天堂大学理事長
	尾 崎 明 夫	協和発酵バイオ(株)常務取締役
	勝 木 元 也	自然科学研究機構理事 基礎生物学研究所名誉教授
	北 原 武	帝京平成大学薬学部教授 東京大学名誉教授
		(学)北里研究所・北里大学客員教授”
	谷 口 維 紹	東京大学大学院医学系研究科教授
	永 井 良 三	東京大学大学院医学系研究科教授
	長 澤 寛 道	東京大学大学院農学生命科学研究科教授
	長 田 重 一	京都大学大学院医学研究科教授
	西 川 伸 一	(独)理化学研究所発生・再生科学総合研究センター副センター長
	福 山 透	東京大学大学院薬学研究科教授
	堀之内 未治	東京大学大学院農学生命科学研究科教授
	三箇山 俊文	協和発酵キリン(株)執行役員
	三 品 昌 美	東京大学大学院医学系研究科教授
選考委員長	山 根 久 和	東京大学生物生産工学研究センター教授
副選考委員長	岩 坪 威	東京大学大学院医学系研究科教授
選考委員	一 條 秀 憲	東京大学大学院薬学系研究科教授
	長 田 裕 之	理化学研究所基幹研究所ケミカルバイオロジー研究領域長
	加 藤 茂 明	東京大学分子細胞生物学研究所教授
	久保田紀久枝	お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授

後藤 由季子	東京大学分子細胞生物学研究所教授
阪井 康能	京都大学大学院農学研究科教授
坂口 志文	京都大学再生医科学研究所生体機能調節教授
鈴木 啓介	東京工業大学大学院理工学研究科教授
清木 元治	東京大学医科学研究所教授
瀬原 淳子	京都大学再生医科学研究所教授
戸井 雅和	京都大学大学院医学研究科教授
中村 春木	大阪大学蛋白質研究所教授
中山 亨	東北大学大学院工学研究科教授
西山 真	東京大学生物生産工学研究センター教授
畠 清彦	(財)癌研究会・有明病院化学療法科兼血液腫瘍科部長
畠山 昌則	北海道大学遺伝子病制御研究所教授
間野 博行	自治医科大学ゲノム機能研究部教授
三森 経世	京都大学大学院医学研究科教授

名 譽 職

名 譽 会 長

名 譽 理 事

木下 祝郎	元協和発酵工業(株)会長
池原 森男	大阪大学名誉教授
伊藤 正男	東京大学名誉教授 (独)理化学研究所脳科学総合研究センター特別顧問
井上 一郎	東京工業大学名誉教授
大澤 利昭	東京大学名誉教授 東京薬科大学名誉教授
岡田 吉美	東京大学名誉教授
小田 鈎一郎	元 東京大学医科学研究所癌ウイルス部教授
榊 佳之	豊橋技術科学大学学長
清水 喜八郎	光仁会病院顧問
菅野 晴夫	(財)癌研究会顧問
中嶋 暉躬	東京大学名誉教授 星薬科大学学長
中村 寛之助	元協和発酵工業(株)会長
早石 修	京都大学名誉教授 (財)大阪バイオサイエンス研究所理事長
藤 卷 正 生	東京大学名誉教授 お茶の水女子大学名誉教授 (財)食生活研究会理事長
松井 正直	東京大学名誉教授
水野 傳一	東京大学名誉教授
柳田 敏雄	大阪大学大学院生命機能研究科教授
山田 秀明	京都大学名誉教授 富山県立大学名誉教授

事 務 局

事 務 局 長

事 務 局 員

江口 有
奥村 美香

平成 21 年 4 月 1 日現在

おわりに

事務局長 江口 有

平成 21 年度の財団年報をお届けいたします。

当財団はメディカルサイエンスからバイオテクノロジーまで幅広い分野に対して助成を行なっていますが、そのような特徴は例えば助成者からの報告書をご覧いただくと分かり易いと思います。今年も報告書をわくわくした気持ちで読ませていただきました。各研究分野にはさまざまな課題があり、それらを解明することでさらに先の可能性が見えてくる、研究にはそのような面白さがあります。今回報告いただいた先生方の研究のこれからの発展を、心から楽しみにしています。

さて、平成 21 年度の当財団トピックスとして、新公益法人制度移行の本格準備を始めたことがあります。一般の方には馴染みが薄いかもしれませんが、110 年間続いた従来の公益法人制度が大きく変わり、平成 25 年までに新しい公益法人として再出発することが義務付けられました。今回の改革の目的は、民間の活力を公益活動により生かすとともに、一部の問題ある公益法人の見直しにあるといわれています。当財団は 20 年以上に亘る実績があり、新制度移行に大きな問題はないと考えていますが、事務局としては結構面倒な準備作業に追われています。来年度には新公益財団としてご披露させていただけるものと思います。

ところで事務局の役得(?)の一つに、大学や公的研究機関からの広報誌等に多く接する機会があります。中には極めて高度な内容を解説したものや、知的好奇心が刺激されるものもあります(もっとも、理解するのはなかなか大変です・・・)。また大学院生顔負けのスーパー高校生の記事を読むと、日本の将来が明るく感じられます。さらに、地域の特性や特産品を生かして研究開発した事例紹介など、結構楽しく読んでいます。引き続き各研究機関の現状把握に努めるとともに、当財団からの情報発信も増やしたいと考えています。ご協力をよろしくお願いいたします。

最後に、公益法人制度が変わろうとも、当財団の「バイオサイエンスを振興し、社会の発展に貢献したい」という設立時の気持ちは全く変わることはありません。今後ともご指導、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

編集後記

毎年春が過ぎこの時期が来ると、年報作成のため1年を振り返ります。昨年より新公益法人移行申請へ向けての準備として経理業務の刷新が進行中です。これまで手計算で作成していた伝票整理や決算業務を見直し、新しく会計システムを導入しました。データを入力すれば自動計算後、アウトプットが印字されます。ですが、そうスマートに進まないのがコンピューターシステムの宿命です。科目の洗い出し、出力フォームの印字順や年度予算の組み換えなど様々な設定調整のため、システム担当との打合せや導入研修の受講など、運用開始まで相当な時間が経過しました。年度末決算と会計監査が無事に終了した週末に、ようやく一年間を纏めた実感が湧いてきました。

今年はまだ新しい試みとして、財団ホームページに創立20周年記念誌のデジタルブック掲載を試みました。ネットワークが加速的に便利になる環境の中で、情報共有及びセキュリティ管理の重要性を改めて実感し、一層のノウハウの蓄積が必要だと感じています。一方で、これらシステムの運用にともない、はっきりと効率化可視化され、その充実感は速攻性を持って染み込んできます。これからも必要とされる方々へのわかりやすい情報発信を心掛け、事務局として一層の努力を念頭に活動を進めたいと思います。

(事務局 奥村 美香)

(財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団 平成21年度 年報 (第11号)

発行日	2010年8月1日
発行者	理事長 平田 正
編集者	常務理事 高橋 充 事務局長 江口 有
発行所	財団法人 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団 Kato Memorial Bioscience Foundation 〒194-8533 東京都町田市旭町3-6-6 電話：042-725-2576 ファックス：042-729-4009 メール：ben.kato.zaidan@kyowa-kirin.co.jp ホームページ：http://www.katoken.or.jp
印刷	芝サン陽印刷株式会社 〒104-0033 東京都中央区新川1-22-13
